



数字の向こうの現実

— ビルムが教えてくれたこと

みなさん、こんにちは。松山赤十字病院の看護師、木本涼です。
2025年10月より、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）パプアニューギニア国事務所に、事業管理要員トレーニーとして派遣中です。今回の派遣が、私にとって初めての国際活動となります。これまでは国内で研修や業務を通して国際医療救援について学んできました。

現在は、会計や事務関連の業務、プロジェクト管理のための会議に参加しています。また、看護師としての経験を活かし、地域の公衆衛生の分野に関する啓発活動をパプアニューギニア赤十字社の職員と共に取り組んでいます。

派遣から約2か月。温かく迎えてくださる皆さんのおかげで、現地の生活にも少しずつ馴染んできました。
そこで、こちらでの暮らしや活動の様子を「POMだより」としてまとめてお送りします。

「POM（ポム）」は、パプアニューギニアの首都・ポートモレスビー（Port Moresby）の略称です。現地では「POM」という呼び方が親しまれており、私にとっても今の生活の拠点となっています。



ビルムに込められた力

そんなPOMでの暮らしが始まって間もない頃、IFRCパプアニューギニア国事務所の五十嵐真希所長が、現地のクラフトマーケットに案内してくださいました。マーケットへ向かう車の中で「ビルム(Bilum)」という紐袋の話を知りました。ビルムは女性たちが一本一本手で編むもので、赤ちゃんを包んだり、食料や薪を運んだり、暮らしの中で欠かせない存在だそうです。

母と子のつながり、そして女性たちの力強さを象徴するもの——その言葉が印象に残りました。マーケットに着くと、色とりどりのビルムが並んでいました。どれも丁寧に編まれていて、模様や色づきも少しずつ違い、作り手の温もりを感じます。
眺めていると、どのお店でも女性たちが声をかけてくれました。明るく笑いながら「これも見てみて」とすすめてくれる姿に、自然とこちらも笑顔になりました。
その一方で、値段を尋ねたときの彼女たちの少し誇らしげな表情が心に残りました。生活のために編んでいるけれど、それだけではなく、「自分の作品を見てほしい」という思いも感じたからです。その姿に、この国の人たちの強さとたくまさが重なりました。
しかし同時に、オリエンテーションで聞いた「高い失業率」「ジェンダー不平等」という言葉が、このとき初めて数字ではなく、現実のものとして目の前に現れたように思いました。



パプアニューギニアの現実と女性たちの希望

パプアニューギニアでは、国連食糧農業機関（FAO）や国際食糧政策研究所（IFPRI）の最新の報告によると、人口の約8割が自給的・半自給的な農業に依存して暮らしています。また、世界銀行などの貧困分析では、国民のおよそ4割が貧困ライン以下の生活を送っていると推計されています。

働く場所の選択肢が少ないなか、特に女性は教育や就労の機会に恵まれにくく、家庭や地域を支える一方で社会的には不利な立場に置かれています。

こうした背景は統計にも表れています。

ジェンダー不平等指数(GII)は162か国中161位、人間開発指数(HDI)も189か国中155位。UNDP(国連開発計画)の報告によると、女性の約6割が生涯のうちにパートナーからの暴力を経験しているといわれています。

そんな現実のなかで、ビルムを売る女性たちは家族を支える大切な役割を担っています。

売上は子どもの学費や生活費、医療費などに使われ、家族の暮らしを守る手段になっています。

お互いに声をかけ合いながらお店を切り盛りするその姿は、この国の女性たちの強さと希望そのものだと感じました。



赤十字の理念と地域の力

赤十字の「脆弱な立場の人々に寄り添う」という言葉は、これまで“支援する側とされる側”という関係を前提にした言葉のように感じていました。

でもここでの暮らしの中で、その言葉は“助ける”というより、“一緒に生きていく”ということなんだと感じるようになりました。

互いに支え合いながら日々を送る人々の姿を見て、「寄り添う」というのは、誰かのために動くことだけではなく、

同じ場所で共に歩むことなのだ気づくことができました。

その気づきを胸に、これからもこの地で、自分にできることを一つ一つ丁寧に続けていきたいと思っています。



あとがき：現地でのモチベーション

病院ではこれまで、直接患者さんと向き合うことが中心でしたが、こちらでは物資の管理や会計処理、書類の整備など、現場を支える仕組みそのものを知る機会が多くあります。最初は数字や手続きに苦戦しましたが、少しずつ理解が深まるにつれて、医療活動もこうした土台の上で成り立っているのだと改めて深く実感しました。

同時に、日々の業務や同僚との会話を通して、赤十字の信頼がどれほど大きな力になっているかを感じる場面も多くあります。そう感じた場面の一つに、現地の同僚が話してくれたエピソードがあります。

ポリオワクチン普及活動で地域集落へ赴いた際、政府の保健員の方が村に入ると人々が警戒して逃げってしまうこともあるそうですが、赤十字の紋章をつけたボランティアの方が先導して村を訪れると、住民たちは安心して話を聞き、協力してくれるといいます。その話を聞き、改めて赤十字という存在の大きさを感じました。

どこにいても信頼を寄せてもらえるのは、世界中の赤十字が同じ原則に基づいて行動を積み重ねてきた結果であり、自分もその一員としてその信頼を守り、次につなげていきたいと思いました。

医療職だからこそ、医療以外の領域を知ることは大切だと思います。どんなに専門的な技術を持っていても、それを支える運営や管理の部分を理解していなければ、チームとしての力は十分に発揮できません。ここでの経験は、自分の視野を広げる大きなチャンスだと感じています。

私のモチベーションは、日々の中で新しい学びや発見に出会えること、そして赤十字の信頼の重みを感じながら働けることです。この経験を通して得た視点を、今後の仕事の中でしっかり活かしていきたいと考えています。

Lukim yu! (またお会いしましょう)